

事件は現場で起きています



「悲牛院花子の生涯」 ～育成をなめたらいかんぜよ～

平成4年営農改善資料『特集育成牛』20版より

広務事業推進課 係長 大島達夫

この物語は、平成4年に営農改善資料『特集育成牛』20版の巻末に掲載された名著です。あれから月日は経過したものの、現状問題となっている生乳生産基盤の維持を考えれば逆に育成の重要性は一層高まるばかりです。今回、南根室地区農業改良普及センターのご了解のもとで、この内容を数回に分けて転載します。是非、お読み頂きたいと思います。この内容、非常に現実に即し作られている反面、家畜の飼養者側には、痛いところを指摘されているのでは無いでしょうか。

今、育成牛は『宝』であり、その宝をどうするのかを考え直す一助になればと思います。

物語は架空ですが、実際にあった様々なエピソードに基づいています。これを読んで、もし思い当たる節があるとすれば、その育成牛は「あなたが気付かない内に大変な目にあっている」ということになります。「このくらい大したこと無い」という油断が彼女達に、強いてはあなたに重大な損失をもたらしています。

この物語は、余りにも軽視された育成技術の現状への警鐘です。主人公の名は花子。戒名は悲牛院花子大姉。幸せ薄い3年半の波乱に満ちた生涯を送った牛です。

誕生

春とは言え、夜半はまだ寒かった。早く済ませて布団に戻りたかったので、主人はロープを仔牛の前肢に掛けて引っ張り始めた。特に難産でもない限り、なるべく自然に分娩させた方がよいという知識は持っていたが、眠たかったし、第一、彼は大きく牛が好きではなかった。

5分程引っ張ると、仔牛はずりりと通路に落ちた。雌だった。彼女は花子と呼ばれることになった。

主人は彼女の鼻や身体を敷わらでざっと拭き、臍の緒の処理を形だけ済ませると親牛の後ろの窓際にトワインで繋いで、母屋へ上がっていった。普段はハッチに入れるのだが、今は全て使用中で、空きが無かった。

牛舎の中は窓が締め切っていたので、温度はそう低くもなかったが、花子はまだ体が湿っていたし、窓からは隙間風が吹き付けて来るので、気が遠くなるほど寒く感じるのだった。



非牛院花子大姉(俗名 花子)→

温度さえ高けりゃ寒くないって思ってる人がほんとに多いのよね。寒さってのは温度、湿度、風、体調の合わさったものなのよ。体をよく拭いて、隙間風の当たらない乾いた場所に置いてくれれば、温度なんか低くても、こんなに寒い思いをしなくて済んだのに。だいたい、なんでもかんでも形だけで済ませばいいってもんじゃないわよ。



友人・ケメ子

明け方近く、切迫した鳴き声で彼女は我に返った。声の主は出産の始まったおばさん牛であった。

主人は、その牛が出産しそうだった事に気付かなかったのか、姿はなかった。お産は軽く、足先が見えてから程なく全身が出てきた。仔牛が床に落ちた弾みで鼻孔から羊水がうまく流れ出たため、自力で呼吸を始めることが出来た。しかし、仔牛は仰向けの姿勢で尿溝にはまり込んでしまい、身動きが取れなくなってしまった。母親は仔牛を舐めようともがくが、スタンションに繋がれているので、どうしようもなかった。

どんなに気を付けていても、こんなことってあるのよね。せめて分娩近い牛は案に動ける清潔な場所に置いてあげるとかして、自由分娩も出来るようになってくれれば有難かったのに・・・。



翌朝

夜が明けると主人夫婦が現れた。尿溝の仔牛はやっと助け出された。何箇所か打ち身はあるが、命に別状はなかった。その仔牛も雌だった。ケメ子と名付けられた。主人は給餌と搾乳をひと通り終え、バケツで2頭の初乳を搾り、それを奥さんがバケツで2頭の仔牛に飲ませた。

奥さんが言った。「ハッチが一杯だけど、どうする?」「フー子はそろそろ出してもいいべ。けど、もう一頭はしょうがねえなあ。ここに繋いどくしかねえべや」

「したら、フー子のハッチ空けて先に産まれた方は入れとくわ」その日の午後、舎内の暖かさに慣れた頃になって、奥さんはフー子という仔牛をハッチから育成の囲いに移し、中の敷わらを取り替えて花子を移した。

入れられたハッチが汚いの。前に入っていたお姉さんの糞や臭いが壁にも地面にも染み込んでるの。ハッチは病気が移りづらいのが最大の利点だと言うけど、これじゃあんまり効果ないわね。

春の嵐

10日程経った頃、みぞれ混じりの雨が降った。風も強かったので、ハッチの中まで雨が吹き込んできた。彼女はハッチの奥にうずくまっていたが、ハッチが狭かったので、時折正面から強い風が吹くと、彼女の身体まで雨が叩き付けた。前日から風邪がみで、下痢もしていたので余計肌寒く感じた。

彼女はハッチの入り口に直接繋がれていたもので、天気の良い日は外に出ることも出来たが、こんな日は中に居るしかなかった。突然、もの凄い力で首を引っ張られたかと思うと、体が宙を舞った。ハッチごと風で飛ばされたのだった。彼女には何が起きたのか分からなかったが、自分の前をハッチが飛んでいくのが見えた。怖かった。余りの驚きと首を絞められていたので、声を出すことも出来なかった。

叩き付けられた。横向きだったので、息が詰まったが、直ぐに回復した。草むらに落ちたのでそうひどい怪我は無いようだったが、後肢を何処かにぶつけたらしく、立とうとするとひどく痛んだ。

たまたま訪ねてきた普及員が見付けて知らせてくれたので、主人がやってきた。ロープをほどき、立たせてくれた。何とか歩けないこともなかった。ハッチも壊れていなかったので元の場所に戻し、今度は一緒に飛ばないように彼女を地面に直接、杭で繋いだ。他の仔牛も同様に繋ぎ直した。

離乳

産まれて2ヶ月経った。小さな頃に掛かった風邪と下痢はやや長引き、成長が停滞していたが、その後たっぷりミルクを貰っていたので、幾分か回復していた。育成配合を気休め程度に、ほんの少量だけ与えられた。乾草も与えられていたが堅いし、うまくないので殆ど食べていなかった。

主人は2ヶ月で離乳と決めていたので、その日から突然ミルクを貰えなくなった。代わりに育成配合を増やされた。腹が減るので食べるには食べたが、いかんせん、殆ど固形物を食べていなかった。第一胃が余り発達しておらず、絶対量が食えなかった。育成配合の栄養濃度が低かったこともあり、成長は再び停滞した。

初乳は出来るだけ早く飲ませて欲しかったなあ。後から風邪をひいたり、下痢をしたりしたのも初乳が遅かったせいじゃないかしら。どうしても初乳を後回しにするなら、せめてもう少し清潔な所に置いて欲しかったわね。



雨が降ると、必ず体が濡れるの。ハッチが短いのよね。あたしらのところは風が強いんだからもっと奥行きを深くとって欲しかったな。風向きや日当たりも考えて欲しかったわね。



さすがにこんなときゃ死んだと思ったわ。ハッチじゃなく地面に直接繋がるとか、少し考えてね。

ミルク以外の物なんて殆ど食べたことなかったのに、いきなり育成配合と乾草だけだもん、そんなに食べられんわよ。もっと早い頃から美味しいスターターでもくれて胃袋を作ってくれなきゃ。これで、もし離乳と同時に群れに移されてたらと思うとぞっとするわね。



つづく